

『尺には尺を』4幕1場の小唄をめぐって<sup>1</sup>

佐々木和貴

本稿では、筆者が編集を担当した大修館シェイクスピア双書『尺には尺を』(*Measure for Measure*) 4幕1場冒頭の小唄を取り上げ、どのようにしてこの箇所注をつけたのか(あるいは、つけることができなかったのか)を述べることで、シェイクスピアのテキストを編纂することの可能性(あるいは不可能性)について考察してみたい。

さて『尺には尺を』は、数あるシェイクスピア作品の中でもさほど有名な作品ではない。その理由は、筆者が大修館双書のために書いた以下の帯文からも推測がつかだろう。

ベッドの中の女性も、死刑囚の首も入れ替わる。題名の意味さえも、旧約聖書の「目には目を、歯には歯を」から、新約聖書の「人を裁くな。汝が裁く基準によって、汝も裁かれん」に読み替えられる。苦くて甘い、深刻なのに笑える「問題劇」の世界へようこそ。

つまり、一般に流布しているシェイクスピア喜劇(いわゆるロマンティック・コメディ)のイメージとは、かなり異なる味わいの芝居なのだ。目まぐるしくトーンが切り替わることに加えて、喜劇の中で「罪と赦し」を扱うという特異なテーマ性ゆえに、20世紀前半を代表するシェイクスピア研究者フレデリック・ボアズが、この芝居について「私たちは興奮し、魅了され、そして困惑する。・・・テーマと特質があまりに風変わりなので、厳密な意味では喜劇とも悲劇とも呼ぶことができない」(Boas 345)と述べ、制作年代が近接し、作風も近似する『トロイラスとクレシダ』(*Troilus and Cressida*)、『終わりよければすべてよし』(*All's Well That Ends Well*)とまとめて、「問題劇」と命名したのも故無しとしないだろう。

この『尺には尺を』というなかなか捉え難い芝居の中でも、とりわけ筆者が注の付け方に頭を悩ませたのが、以下の4幕1場冒頭の小唄であった。

*Enter Mariana, and Boy singing*

マリアナと少年が登場。

BOY [*Sings*]

少年(歌う)

Take, O take those lips away,

甘い嘘をつく唇よ

That so sweetly were forsworn,

ああ、どこかへ行って。

<sup>1</sup> 本稿は、2024年6月15日(土)成城大学国際編集文献学研究センター主催の「シェイクスピア戯曲編集のプラクシス—大修館シェイクスピア双書 第2集/第2期 出版記念イベント」での報告を大幅に改稿したものである。また、JSPS 科研費 20H01242 および 24K00048 の助成を受けた成果の一部でもある。

And those eyes, the break of day,                      朝と見まごう眼差しよ  
Lights that do mislead the morn;<                      ああ、とこかへ消えて。  
But my kisses bring again, bring again,                      けれど私の口づけは戻ってきて、  
Seals of love, but sealed in vain, sealed in vain.                      虚しく捧げた口づけは戻ってきて。

*Enter DUKE [disguised as a friar]*                      修道士に変装した公爵登場。

MARIANA

マリアナ

Break off thy song, and haste thee quick away.                      歌はもういいわ、向こうへ行行って。  
(4. 1. 1-7) <sup>2</sup>

この小唄が歌われるのは、事態を収束する鍵となる「ベッド・トリック」といういささかあざとい仕掛けのために、シェイクスピアがあらたに創造したマリアナというキャラクターが初登場する重要な場面だ。彼女は公爵代理のアンジェロに捨てられて、一人で農家に住んでいるという設定なので、彼女が過去の恋を嘆く小唄を聴いていること自体は不自然ではないだろう。だがこの芝居で小唄が挿入されているのは、実はここだけである。しかも、たとえば『十二夜』のような唄が散りばめられたロマンティックな喜劇とは異なり、「悪徳がぐつぐつ煮えたぎり鍋から吹きこぼれそうな」(5.1.316-17)ウィーンを舞台に、変装した公爵ヴィンセンショーが悪徳の懲罰者として活躍する風刺的な喜劇『尺には尺を』の中で、この過剰なまでにロマンティックな小唄はどうも座りが悪い。そこで、この小唄にどのような注をつけるか悩んだ末に筆者が参照したのは、現代のテキスト編纂の原型となった、18世紀のシェイクスピア全集の编者たちの意見だった。

調べてみたところ、この小唄について最初にコメントしたのは、ルイス・シオボールドで、彼の編纂した全集(1733)には以下の注がつけられている。

当時きつと大いに流行っていたこの小唄は、以下のもう一連とともに、ポーモン & フレッチャーの『血まみれの兄弟』にも挿入されている。

Hide, oh, hide those Hills of Snow,                      隠せ、ああ隠してくれ雪白のあの丘を  
Which thy frozen Bosom bears;                      そなたの凍てついた胸にある。  
On whose Tops the Pinks, that grow,                      その頂にあるピンク(の乳首)は  
Are of those that April wears.                      4月が身にまとうものだ。  
But my poor Heart first set free,                      だがまずわが哀れな心を自由にしてくれ、  
Bound in those icy Chains by thee.                      そなたによって氷の鎖に繋がれた。

<sup>2</sup> テキストからの引用は大修館版の佐々木和貴編集に拠る。また日本語引用は、ちくま文庫版の松岡和子訳を利用させていただいた。

・・・この2連目がここ[『尺には尺を』]で省略されている理由は明白である。マリアナは、アンジェロへの愛と、彼の裏切りに相応しい小唄を歌ってもらっているのだが、この追加の連は、[男性の]恋人が彼の恋人に宛てた場合にのみ、似つかわしいものなのだ。(Theobald I:365)

また、アレクサンダー・ポープとウィリアム・ウォーバートンによる全集(1747)でも、この小唄には以下のようなコメントが付されてる。

これはシェイクスピア自身の筆になるソネットの一部であり、2連からなるもの。そして、実に甘美なものなので、もうひとつの連をご覧になっても、気を悪くされる読者はいないだろう。[以下、2連目の引用が続く](Pope and Warburton I:367)

ちなみに両者の注は、サミュエル・ジョンソンの全集(1765)でも並べて紹介されており、当時はこの小唄がシェイクスピア作なのは自明のこととされていたようだ(Johnson I:337)。したがって、18世紀シェイクスピア学の完成者たるエドモンド・マローンも全集(1790)の注で、(根拠は示されていないが)作者はシェイクスピアだと断言している。

この小唄は、全体が1640年刊の[ジョン・ベンソンによる]シェイクスピア詩集に見いだせるが、これはいかなる権威もない本だ。とはいえ、これらの連が、我らが作者[シェイクスピア]によって書かれたと、私は確信している。(Malone II:85)

18世紀の編者たちは、この小唄がフレッチャーの芝居にも使われていることは突き止めていたが、『尺には尺を』初期版本は、シェイクスピアの最初の全集である通称ファースト・フォリオ(1623)に収められたものだけであり、そこに載せられている以上、この小唄の作者がシェイクスピアであることに疑念は抱かなかったということだろう。もっとも、19世紀に入るとジョージ・スティーブズは、その集大成と呼べる全集第5版(1803)で、この唄の作者について判断を保留している様子が、以下の注から窺える。

[ポープ版全集の詩集の編者ジョージ・]シーウェルと[ロウ版全集に詩集を補足したチャールズ・]ギルドンは、シェイクスピアの詩の中に、この小唄を印刷している。しかし彼らは、それ以降本当の作者が明らかになった他の多くの詩作品も、[シェイクスピア作として]同じ様に印刷しているので、彼らの証言は当てにならない。この小唄はシェイクスピアの生前に印刷されたジャガード版[1609刊]のシェイクスピア・ソネット集には見いだせない。(Steevens VI:338)

だが、このスティーブズの疑念が、この後、さらに追求されることはなかったようだ。むしろ、かの有名な詞華集『ゴールデン・トレジャリー』(*The Golden Treasury*, 1861)に、第1連のみがシェイクスピア作として採録されたため、19世紀以降、この小唄はシェイ

クスピアの代表的な抒情詩として、一般に流布することになる。

したがって、作者の問題がこの小唄をめぐる注の中心的なテーマとして、本格的に取り上げられるようになったのは、二十世紀も後半になってからのことだろう。現代の版本の中で、この問題についてもっとも詳しく論じているのは、オックスフォード版(1991)とアーデン版第3シリーズ(2020)である。以下にその議論を紹介しよう。

まずオックスフォード版の編者N.W.ボウカットは、これまでの議論を整理して、この小唄の作者について、以下の2つの仮説を提示している。

仮説1 シェイクスピアは『尺には尺を』で使うために、最初のスタンザを書いたが、曲は今に残っていない。フレッチャーはそれを『血まみれの兄弟、ロロ』(*The Bloody Brother, Rollo*)のために借用することに決めて、もう一連付け加えたが、そのためにこの詩はまぎれもなく、男性から女性に宛てたものになってしまった。新たな、あるいは改訂版用の曲が、おそらくジョン・ウィルソンによって用意されており、その写しがいくつか現存している。

仮説2 フレッチャーがこの詩全体を書いた。オリジナル版の『尺には尺を』には、この唄は含まれていなかったが、ジェイムズ朝後期に再演された際、これを挿入するのがふさわしいと考えられたのだ。ただ、最初のスタンザだけが使われたのは、切り離すことによって、女性から男性に向けたものとみなしえたからである。(Bawcutt 70-71)

ただ、ボウカットは、シェイクスピアとフレッチャーのどちらが、この小唄の作者かを確定するには証拠があまりに少ないとして、結論を避けている。

次に最新のアーデン版(2020)だが、編者のA. R. ブラウンミュラーとロバート・ワトソンは、オックスフォード版の仮説2(作者はフレッチャー)を支持する立場から、以下のような議論を展開している。

マリアナの登場の仕方もまた、室内劇場[黒僧座]への移行にふさわしいだろう。そこだと静かな音楽も聴こえるし、そのことが彼女の最初の登場に唄がつくことの説明にもなるだろう。さらにまた、この唄自体は『ノルマンディ公爵ロロ』(1617-20)という芝居から借用されたように思える。こちらのほうが、『ロロ』が、この唄をシェイクスピアから借りてきたと想定するよりも、筋が通る。というのも『尺には尺を』に出てくるのは、『ロロ』の2連からなる唄の一部に過ぎないし……しかもこの唄は[内容的に]『尺には尺を』よりも『ロロ』のほうがびったりだからだ。(『尺には尺を』の場合、登場人物[マリアナ]はどうやら5年間も不実な恋人とあっていないので、この唄にはふさわしくないように思える。)(Braunmuller and Watson 121-22)

さらにアーデン版の编者たちは、現存するテキストが黒僧座での再演時のものである証拠として、韻律の乱れが生じている例をあげ、それが「役者たちの瀆神的表現を禁じる条例」(Act to Restrain Abuses of Players, 1606)のため、たとえばGodがHeavenに書き換えられた結果、生じたものだろうと推測している。要するに、ファースト・フォリオ(1623)所収の『尺には尺を』のテキストは、作者の死後に再演(1621?)された時のもので、その際にフレッチャー作『ロロ』の劇中歌が入り込んだと主張しているのだ(Braunmuller and Watson 117&121)。

こうした、シェイクスピアの作品が加筆・改変されているという可能性は、ファースト・フォリオを聖典化していた18世紀の编者たちにとっては、おそらく思いもよらない、あるいは気がついたとしても無視せざるを得ないものだったろう。ところが近年では、文体研究の進展の結果、再演時に加筆したのはおそらくトマス・ミドルトン(Thomas Middleton)だったのではないか、という有力な仮説すら浮上しているのだ。例えば『ウィリアム・シェイクスピア：テキスト必携』において、编者のスタンリー・ウェルズとゲイリー・テイラーはこの小唄とミドルトンの関係を以下のように論じている。

この[ミドルトンの改作という]仮説を受け入れる编者は、ミドルトンの1.2の改変を取りのぞき、4.1の小唄とそれに続くセリフも削除し、公爵の独白を元々の位置に入れ替え・・・ることになるだろう。これらを変更すれば、シェイクスピアが最初に書いたと推測されるテキストを復元することになるし、このようなテキストは必要だが、しかし現行版でそれを提供するの時期尚早だろう。(Wells and Taylor 469)

ところがテイラーは、21世紀に入ってよいよ機が熟したと判断したのか、自らが编者を担当したミドルトンの新しい作品集(2010)では、さらに踏み込みこんで、『尺には尺を』をミドルトンの改作として収録している(Taylor and Lavagnino 1542-85)。

以上、これまでのこの小唄(特にその作者)をめぐる議論について、簡単な要約を試みたが、それだけでもいろいろな疑問が未解決であることがわかるだろう。

まず疑問(1):この唄の作者は結局だれなのか。シェイクスピアなのか、フレッチャーなのか。はたまた、共作なのか。そして疑問(2):この唄が再演の際に挿入されたものだとすれば(そして、その可能性は高いように思えるが)、シェイクスピアの死後に加筆・改変されたとおぼしきテキスト部分を、どのように扱うべきなのだろうか。さらに疑問(3):そもそもシェイクスピアのオリジナルなテキストとは、確定できるものなのか。それとも、初期近代の演劇テキストにおいては、作者は意味を生成するソースの一つに過ぎないという立場からすれば、それは、共作者・俳優・劇団・印刷工などによって、たびたび変更され、書き直される、流動的なものと捉えるべきなのか<sup>3</sup>。そ

<sup>3</sup> 筆者は、シェイクスピア自身の手稿が存在しない以上、そのテキストの純粋性を追求するよりは、む

の上で、疑問(4):再演があったとして、4幕1場冒頭にこの唄を挿入することになった要因は何なのか?上演する劇場(室内劇場の黒僧座)への対応か、劇団の要請か、観客の好みの変化か、それとも改作者(ミドルトン?)の判断なのか。どれも一筋縄ではない難問ばかりである。

そして、18世紀から現代までのさまざまなエディションを見比べて、私がこの小唄につけた注は、結局、以下のような簡素で平凡なものになってしまった。

1-6. Take, O take... sealed in vain] この歌は英詩の著名なアンソロジー *The Golden Treasury of English Songs and Lyrics*(1861)に 'Madrigal' という題で収録されたこともあって、シェイクスピアの有名な抒情詩のひとつになっている。

シェイクスピアのテキスト編纂がはらむ多様な可能性と、それを的確にまとめることの不可能性の間で立ち竦んでしまったというのが、正直なところである。

ちなみに本報告で取り上げた小唄は、こうしたシェイクスピアのテキスト編纂の可能性と不可能性の一例に過ぎない。それ以外にも、シェイクスピアの本文には、当時の印刷や上演の事情と関わる意味の通らない箇所や、シェイクスピアの筆になるものなのか不明な箇所が、数多く存在している。ファースト・フォリオの刊行以来、400年にわたって優れた編者たちが取り組んできたのは、シェイクスピアのテキストに点在しているこうしたいわば「虫食いの穴」に、さまざまなパッチをあてて繕いながら、解釈の可能性と不可能性を擦り合わせ、テキストの「あるべき姿」をさまざまに模索する作業だったと言っても過言ではないだろう。そして、この大修館シェイクスピア双書もまた、過去の編者たちが生み出した「シェイクスピアのテキスト」を引き継ぎ、それを読み解くプロセスの中で、その解釈の可能性と不可能性の間に折り合いをつけながら、もう一つのシェイクスピアの「テキスト」を再生産しようとした試みである。それによって、シェイクスピアを次の世代に「骨董品」としてではなく、いわば「生もの」として、つまりその生命力を引き出す形で手渡すことができたかはいささか心許ないが、願わくは、この双書がこののち長く読み継がれること、さらにその賞味期限が過ぎれば、速やかにまた新しいエディションのテキストに更新されていくことを期待して、この報告の結びとしたい。

---

しろ、さまざまな要素が流れ込んでいる異種混交性 (Hybridity) を認めて、それをも含めて「シェイクスピアのテキスト」として扱うべきではないかと考えている。この立場に立てば、例えば、大橋洋一がミヒャエル・パフチンに倣って説くように、シェイクスピアのテキストを、出版時点で完成したものとしてではなく、絶え間ない上演や改作、そして校訂や解釈によって更新され続ける、いわば未完の開かれたコーパスとして捉えることも可能かもしれない(大橋 282-9)。

引用文献

- Boas, Frederick S. *Shakespeare and his Predecessors*. Charles Scribne's Sons, 1900.
- The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*. Arranged with notes by Francis Turner Palgrave, Macmillan and Co., 1861.
- Middleton, Thomas. *Thomas Middleton: The Collected Works*. Edited by Gary Taylor and John Lavagnino, Oxford UP, 2010.
- Shakespeare, William. *Measure for Measure*. Edited by N.W Bawcutt, Oxford UP, 1991. The Oxford Shakespeare
- . *Measure for Measure*. Edited by A. R. Braunmuller and Robert N. Watson, Bloomsbury, 2020. The Arden Shakespeare 3rd Series.
- . *Measure for Measure*. Edited by Sasaki Kazuki, Taishūkan, 2023. 大修館シェイクスピア双書.
- . *Mr. William Shakespeares Comedies, histories, & tragedies*. London, 1623. The First Folio.
- . *The Works of Shakespeare: in seven volumes. Collated with the oldest copies, and corrected; with notes, explanatory, and critical: By Mr. Theobald*. London, 1733.
- . *The works of Shakespeare: in eight volumes: the genuine text (collated with all former editions, and then corrected and emended) is here settled; with a comment and notes, critical and explanatory. By Mr. Pope and Mr. Warburton*. London, 1747.
- . *The plays of William Shakespeare: in eight volumes: with the corrections and illustrations of various commentators: to which are added notes by Sam. Johnson*. London, 1765.
- . *The Plays and Poems of William Shakespeare, in ten volumes; collated verbatim with the most authentick copies, and revised; with the corrections and illustrations of various commentators; By Edmond Malone*. London, 1790.
- . *The Plays of William Shakespeare. In Twenty-One Volumes. With the Corrections and Illustrations of Various Commentators. To which Are Added, Notes by Samuel Johnson and G. Steevens. The Fifth edition. Revised and Augmented by I. Reed, with Glossarial Index, ed. Issac Reed*. London, 1803.
- Wells, Stanley & Gary Taylor, editors. *William Shakespeare: A Textual Companion*, Norton, 1997.

大橋 洋一、「いつシェイクスピアはシェイクスピアであることをやめるのか？—アダプテーション理論とマクロテンポラリティ」、『舞台芸術』6 (2004年)、255-94頁。  
 シェイクスピア、ウィリアム、『尺には尺を』松岡和子[訳]、ちくま書房、2016年。

## On the Song of Act 4, Scene 1 in *Measure for Measure*

Kazuki Sasaki

The report examines the song from Act 4, Scene 1 in *Measure for Measure*, edited by the author and published in the Taishūkan Shakespeare Series. By comparing the commentaries of 18th-century editors of *Shakespeare's Works* with those of modern editions, it is clear that this song still holds many mysteries to be uncovered, especially regarding authorship. Furthermore, it suggests that the task of the distinguished editors was to patch the so-called 'wormholes' scattered throughout Shakespeare's texts while balancing the possibilities and impossibilities of interpretation and exploring the 'ideal form' of the text in various ways. Finally, this report concludes with the hope that the Taishūkan Shakespeare Series will continue to be read for many years to come, and that it will be updated with newly edited texts in due course.